

『おすしが ふくを かいにきた』 田中達也

パセリが森に、台所用スポンジが海や砂漠に。野菜やくだものやお菓子などの食べものや文具などの身の回りのものと小さなジオラマ用の人形を組み合わせて、身近なものを何かに見立てる「みたて」の世界。思わぬ発想に「くすり」とさせられます。インスタフォロワー数、なんと 360 万！ 図書館でもそれを本にまとめた『MINIATURE LIFE』が大人気の田中達也さんの絵本！ マグロを背中に背負った「おすし」。この姿だけでつかみはOKなのですが（サングラスまでかけています！）、彼の行き先は洋服屋さん！ お店にはエビやタコがぶら下がっています。マグロはお洋服だったのですね！ 「サーモンにします？」「おもいきってトロにしようかな？」ほかにもコーンだけの姿のアイスがぼうし（クリーム）を買いにきたり「人気の抹茶はいかがです？」、シュウマイがせいろのサウナに入りきたり。ソーセージのくるま（パン）はいろんな種類があり、イチゴがさがすベッドはふっかふかのショートケーキなのです！

☆『違い指先が触れて』 島口大樹

僕が、私が、主語がくるくると入れ替わり、僕と私の距離がなくなり、僕も私もなくなったかのような状態を表す一つながりの文章。「一志と杏の視点が溶け合った文章は、小説が到達し得る美の限界値を更新したのではないだろうか」（金原ひとみ）。幼いころに事故で両親を亡くし、都内の施設で育てられたのちに静岡の里親にひきとられ、東京の銀行に就職した一志は、左手の薬指と小指の先を失っている。なくしたのは物心のつくまえで兎に噛まれたからだそうだが、そのときのことを彼は覚えていない。そんな彼の職場に、見知らぬ女性が突然現れる。「ねえ、覚えてる？」と尋ねる彼女は名前を杏といい、施設で一緒だったのだという。嘘みたいな話だという前置きのあとで、彼女はこう切り出した。「私たちの記憶が消されているらしい」。だから、一緒に失くした記憶を探しにいこうと。二人は記憶操作に関わったとされた大山と接触する。大山は、彼の組織は施設に預けられた子どもの不幸な記憶を本人の知らない間に抜き取っているのだという。そして、その記憶のデータをアーカイブし、再発防止のために一部の者に活用させていくのだと。

### ☆『月の満ち欠け』 佐藤正午

佐藤正午の最高傑作と名高い直木賞受賞作が、目黒蓮（Snow Man）×有村架純、大泉洋×柴咲コウの豪華キャストで映画化！「あたしは、月のように死んで、生まれ変わる」。転生、生まれ変わりの物語です。にわかには信じがたい転生の物語を、直木賞受賞も納得のうまさ読みやすい文章で説得力のある感動的な最高の物語にしたてあげています。大学2年の三角哲彦は、ある梅雨の日にバイト先のレンタルビデオ屋の店先で雨宿りする瑠璃と出会った。絵に描いたような一目惚れをした三角は八月にまんまと彼女と映画館で再会を果たし、二人は恋人になった。年上の瑠璃は人妻で不倫の関係だった。瑠璃は、生まれ変わってまた三角と出会うことを望んでいた。そんな瑠璃は事故で本当に亡くなってしまふ。それから7年後、千葉の稲毛に暮らす小山内堅の娘・瑠璃に異変が起きる。7歳の秋、高熱を出したあとに彼女は明らかに変わった。大人びた表情を見せ、昔の流行歌を歌い、デュポンのライターを見分ける。「あの子は知るはずのない昔のことを知っているし、そのことを隠そうとしてる」。一人で電車に乗って高田馬場まで行ってしまうのだ…。

### ☆『しろがねの葉』 千早 茜

好きな作家だった千早さんは、やっぱりすごい作家だったと改めて見直させられた大傑作！彼女には珍しい時代小説でもあります。タイトルの「しろがねの葉」とは、銀の溶けた水を吸い上げて銀の行き渡った葉脈がきらめく葉のこと。「こんなきれいなものがあるのか」「目にすれば、狂れるぞ」。貴重な銀のありかを知らせてくれます。戦国時代の銀山が舞台。銀を掘るために無数に穿たれた穴、間歩。その闇の暗さが描かれます。銀山のおなごは三たび夫を持つと言われます。長いこと潜れば石粉を吸って肺を病む間歩のなかでの過酷な労働が、男たちを早死にさせるのです。夜目が利き、暗闇を怖がらない子どもだったウメは、田を捨て逃げ出した両親とはぐれ、銀を採って人々が暮らす石銀集落で「銀の気が視えると謳われた山師」喜兵衛に拾われる。喜兵衛に間歩を見せられたウメは、目を凝らしても、凝らしても、見えない真実の闇を知り、初めて闇を怖ろしいと感じるのだった。喜兵衛に面白がられ、銀山の知識と秘められた鉱脈のありかまで授けられたウメは、女だてらに間歩で働き出す。ウメにとって喜兵衛は、親代わりであり、師匠であり、初めて愛した男でもあった。しかし、時代が徳川の世となり、喜兵衛は去ってしまうのだった。庇護者を失って銀の山に投げ出されたウメは、ひとりで生きていくための選択をする…。

## ☆『文にあたる』 <sup>む た さ と こ</sup> 牟田都子

「校正者にとっては百冊のうちの一冊でも、読者にとっては人生で唯一の一冊になるかもしれない。誰かにとっては無数の本の中の一冊に過ぎないとしても、べつの誰かにとっては、かけがえのない一冊なのだ」。校正というお仕事をご存知でしょうか？ 校正とは原稿の語句や内容の誤りを発見し、正す仕事です。とにかく誤植をなくす、漢字の誤字や不適切な言い回しを直すくらいの仕事だと思っていたら、大間違い！ この本を読んで、そのとてつもない深さを知りました。校正には誰もが納得する「正解」があるとは限らないのです。常に完璧であることを求められながら、完璧な仕事をするのはほぼ不可能。一つでも誤植を見逃せば0点。本ができあがるのに多大な貢献をしながら、名前がクレジットされることすらない。報われない仕事のようにですが、この本を読むと作者の校正への愛と矜持が存分に感じられます。校正者は森羅万象なんでも知っているように思われがちですが、そんなことはないのだそう。「調べる」こと、その前にまず「疑う」ことが大切。「わたしは凡庸な人間です。ゲラを読んでいて即座に『事実と違う』と看破できるほどにももの知っているわけではありません。カワウソの肉球の数が書いてあったら実際何個あるのか調べるのは、たとえカワウソの専門家であっても間違えることがあるのを知っているからです」。本が信頼されるものであり続けるのは、校正があるから。

## 『シンプルな情熱』 アニー・エルノー

毎年ハルキが獲れるかと大騒ぎだったのに、もはやニュースにもならないのが少しさみしいノーベル文学賞、今年フランスの代表的な作家、アニー・エルノーさんが受賞しました。「ジェンダーや言語、階級による大きな格差によって特徴づけられる人生を、一貫して様々な角度から検証してきた」ことが評価されました。彼女は、自分の人生をそのまま小説にする「オートフィクション」（自伝的なフィクション）の手法で知られています。この作品も、年下の不倫相手との肉体関係を赤裸々に描いて大反響となりました。映画化され、21年のベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞し、「あのこと」の邦題で12月に公開が予定されています。「昨年の九月以降わたしは、ある男性を待つこと一彼が電話をかけてくるのを、そして家へ訪ねてくるのを待つこと以外何ひとつしなくなった」。離婚後独身でパリに暮らす女性教師が、妻子ある若い東欧の外交官と不倫の関係になります。経験も学もある大人の女性を、愛する人との関係だけがすべての存在に変えてしまう、それが恋。ただ待つ女の物語。

## 『IMAGINARIUM』 junaida

ついに観にいきました♪ この本は、立川の PLAY!MUSEUM で開催されている junaida さん初の大規模個展「IMAGINARIUM」にあわせて刊行された図録です。タイトルは imagination の museum から（なんてすてきなネーミングなのでしょう！「想像の美術館」なんて！）。その名のとおり、彼の想像力が凝縮されています。たとえば、表紙にもなっているメインビジュアルは、黒い帽子をかぶってコートを着た三つ編みの女の子の後ろ姿の半身で、帽子の上には個性的な建物やカラフルな花々が街をつくっており、そこには子どもたちや動物たちや鳥たちや怪物たちが暮らしています。これが、junaida さんの想像力の世界。なにせ帽子の上の街ですから、それを表現するにはものすごく細かくすべてのものを描かなくてはなりません。緻密極まる作品。この展覧会では、いままでに発表されたほとんどの作品が集結し、400 点超もが陳列されるというアナウンスを見たとき、そんなに大きくはない PLAY!MUSEUM に収まりきるのかしらと心配になりましたが、大丈夫、一枚一枚の原画が小さかったのです。驚くべき細密さなのでした。『Michi』『の』『怪物園』と出す絵本がつぎつぎと評判になり、これまでは知る人ぞ知る存在だった（本校ではすでに大人気でしたが）junaida さん、これで確実に全国区になると思われます♪

## 『見立て日本』 松岡正剛 太田真三 写真

ミニチュアの「みたて」の世界に始まった今号の図書館通信は、また「見立て」に帰って閉じられます。この本は、「編集者」「本の人」「知の巨人」である（せーやさんもリスペクトしている）松岡正剛さんが、ジャパネスクな写真に文章を添えてキーワードでまとめた雑誌の連載をまとめた本で、タイトルのとおり「見立ての日本」が語られています。日本人は見立てが得意で、あらゆるジャンルでそれが使われてきました。連想と暗示を駆使してほのめかす見立てによって、かえって物事や事態の本質が伝わることもあるのです。この連載は大衆雑誌の連載でしたが、読み流すことのできない「ほう」という感動を与えてくれます。たとえば、「化粧」。「けわい」と読みます。ネイルアートの施された指先の写真に添えられた文章はこう。「『気配』に通じる言葉でもあって、髪型や顔の様子を紅や白粉おしろいで変化させて目鼻立ちを際立たせ、その立ち居振る舞いに懸想けぞうしたくなるような様子をつくりだすことをいう。懸想をおこさせるもの、それが化粧だ」。ふむ。日本ならではの化粧術はユニークだったが、最近はずべて「かわいい」に一括りにされているのが不満だとか。